

地域の未来をつなぐ ―食を起点とした学びと 価値共創―

早稲田大学創造理工学部経営システム工学科
教授

野中 朋美



Tomomi Nonaka

GastroEduは、食を起点に、地域や人、産業、教育、そして世界をつなぐ学びと価値共創の取組みである。立命館大学石田研究室、慶應義塾大学白坂研究室、武庫川女子大学本田研究室、早稲田大学野中研究室を中心に、生産者、料理人、菓子職人、研究者、自治体、企業、学生、子どもたちがかわりながら、産学官の連携として活動を広げている。

GastroEduという名称は、食科学(Gastronomic Sciences)、宇宙、教育を組み合わせた造語である。ある食材をテーマに、その背景にある風土、歴史、文化、科学、生産、流通、調理、そして食べる人の感性を多面的に学ぶ。地域内外から多様なステークホルダーが集まり、地域の価値を語り直し、未来の可能性を考える。

この活動の出発点は、二〇二〇年のオンライン教育である。対面での学びが難しくなった時期に、オンラインだからこそ世界とつながるわくわくする未来の教育をつくれないうかと、石田雅芳教授と議論した。最

初のテーマはトマトアドベンチャーであった。小学生がイタリアのトマト畑やナポリのピッツァ職人とながり、食品ロスを学び、創造性を料理のアイデアに込めて、トマト料理の提案を行った。子どもたちは、身近な食材が世界の農業、職人の技、食文化、環境問題と結びついていることを体験的に理解していく。

次に取り組んだのがレモンアドベンチャーである。中学生を対象に、レモンの味や香り、色の違いを観察し、柑橘の多様性を科学と歴史、感性からの多視点で学んだ。イタリア・フィレンツェの美術館、スペイン・バレンシアの果樹園・研究所、そして日本の柑橘文化をつなぎ、レモンを通じて生物多様性、歴史、アート、豊かさの意味を考えた。食は、単なる栄養や消費の対象ではなく、世界を知覚し、社会を考える入口になる。

地域の価値を語り直す

GastroEduでは、海外との交流を大切に行っている。海外の専

門家、生産者、職人、研究者といった外からの知に直接触れることは、参加者にとって大きな刺激になる。異なる文化や地域の視点に触れることで、自分たちの地域の当たり前が問い直される。外からの専門知は、地域の人々が自分たちの価値を再発見するための鏡になる。

レモンアドベンチャーは、現在も地域と連携しながら発展している。広島県尾道市瀬戸田町では、レモンを起点に、地域の人々と国内外の専門家をつなぐ取組みを続けている。瀬戸田は国産レモンの産地として知られるが、地域の価値はその高い品質や生産量、知名度だけで語り尽くせない。瀬戸内海の景観、温暖な気候、島の暮らし、農家の工夫、菓子職人の技、観光客との出会い、子どもたちの学びが重なって、レモンの価値は立体的になる。

これらの活動で大切にしているのは、本物の知に触れることである。画面越しであっても、畑の風、果樹園の色、職人の手元、地域の人の言葉に触れると、学びは抽象的な知識

ではなく、自分の経験につながる。手を動かし、自らの言葉で交流し、生産者や専門家から反応を受けて学ぶことで、体験が地域を超えて広がっていく。

世界の距離を縮める

GastroEduでは、先進的なテクノロジーも積極的に取り入れている。遠く離れた世界との距離を縮め、現地の空気や手触りを、できるだけリアルに感じられる学びの場をつくるためである。イタリアのトマト畑と中継した時には、ヴェスヴィオ火山を望む風景と、抜けるように美しいイタリアの青空が画面の向こうに広がっていた。レモンや柑橘を扱う場では、果物の皮の質感や香りを想像しながら、現地の果樹園の人々の言葉に耳を傾けた。海辺の地域とつながる時には、漁師の語る海の様子や、その土地で暮らす人々のまなざしが伝わってくる。テクノロジーは、単に便利な道具ではなく、人と人、地域と世界、知

未来へ続く場づくり

識と体験を結び直す基盤である。遠く離れた専門家や生産者の知に触れ、現地の風景や声を共有することで、参加者の想像力は大きく広がっていく。

GastroEduの場では、教える人と教わる人の関係も固定されない。専門家は知識を伝えるだけでなく、参加者との交流から生まれる素朴な問いから学ぶ。地域の人々は、外部の視点を通じて自らの仕事の意味や地域の価値を再認識する。学生は、地域の課題を単なる研究対象としてではなく、ともに考える相手として捉える。そこに生まれるのは、一方向の教育ではなく、多様な人が学び合う価値共創の場である。

食をテーマにすると、人は自然に話し始める。好きな味、故郷の記憶、土地の風景、手間のかかる作業、失われつつある技、未来に残したいものの。食は、専門性の違いを超えて人をつなぐ媒介になる。だからこそ、食

を起点にした学びは、地域づくり、産業づくり、人材育成を結び付けることができると感じている。

GastroEduが育てたいのは、かわる人にとっての「わくわく」である。子どもにとっては、世界とつながる驚きであり、学生にとっては、自分の学びが社会と接続する実感である。地域の人にとっては、自分たちの仕事や暮らしの価値を見直す機会である。専門家にとっては、自らの知を地域や次世代に開いていく挑戦である。

地域の資源を見つめ直し、人と人が出会い、対話し、小さな試行を重ねるなかで形になる。食をテーマに学ぶ体験から地域の未来を考えることができる。遠く離れた海外の知に触れ、地域の人々と経験を結び直すことで、新たな学びや交流の輪が生まれる。GastroEduは、その輪を広げる船のような存在でありたい。かわる人がそれぞれの場所で何かを始めたい。そのようなわくわくを育む場を、これからも仲間とともにつくり続けていきたいと願う。